

*Society of*

*Elementary*

*Education and*

*Curriculum*

初等教育カリキュラム学会

第8回大会

# 発表要旨集録

2024年1月7日(日) 於：広島大学

初等教育カリキュラム学会

9:00～9:30

グローバル・イシューの複雑性を捉える初等社会科学学習単元の開発とその検証

中村 祐哉

(広島大学大学院人間社会科学研究所教職開発専攻教育実践開発コース/熊野町立熊野第一小学校)

本研究では、初等教育段階期の学習者（小学校第5学年を対象）が、グローバル・イシューの「複雑性」を捉えることが可能な社会科学学習単元の開発を行った。ここでは、学習者が「複雑性」を捉えた先に、抽出することが可能であると考えられる「グローバル・イシューに対する暫定的な介入の起点創出」までを見据えた。また、学習者が記述したリフレクションやリンケージマップの分析を通して、開発単元の有用性についても検証を行った。

キーワード：グローバル・イシュー、複雑性、介入の起点

9:30～10:00

米国新社会科におけるエンパシーの活用ーワシントン大学初等社会科学プロジェクトの場合ー

渡邊 大貴（広島大学附属三原小学校）

本研究の目的は、米国新社会科の一つであるワシントンプロジェクトにおいて、どのように、なぜエンパシーへの着目がなされたのかを明らかにすることにある。米国では、1960 から 70 年代にかけて新社会科のカリキュラム運動が活発化した。日本においても、ここで提出された先鋭的な授業モデルについて分析がなされてきたが、エンパシーの活用については十分に明らかになっておらず課題である。

キーワード：米国新社会科、エンパシー、ワシントン大学初等社会科学プロジェクト

10:00～10:30

さらに進む教育現場の ICT 化～令和 2 年度・6 年度用小学校デジタル地図帳（デジタル教科書を含む）の比較から～

岡本 龍治（（株）帝国書院 ICT 開発推進室）

新型コロナウイルスの大流行、GIGA スクール構想及び文科省の学習者用デジタル教科書普及促進事業をきっかけに飛躍的に進んだ教育現場の ICT 化。令和 2 年度用小学校用教科書から二次元コード（QR コード）も登場し、タブレット端末の利活用を促す工夫が各所で施されている。

本発表は令和 2 年度と令和 6 年度の小学校デジタル地図帳（帝国書院）を例に、学校現場の ICT が今後どのように進んでいくか考察したものである。

キーワード：二次元コード、学習者用デジタル教科書、双方向

**10:45～11:15**

国語科と生活科の教科横断的な学習の実践—小学校 1 年生国語教材「見つけたよ、いきものの ひみつ」を中心に—

勝倉 明以（名古屋市立東丘小学校）

学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントに基づいた教科横断的な学習を行うことが推奨されている。そのため、本研究では、小学校 1 年生の生活科「むしのふしぎを みつけたよ」で観察した虫の様子を基に、国語科「見つけたよ、いきものの ひみつ」の学習において、虫を紹介する文章を書く実践を行った。本発表は、複数教科の学習を関連付けて行った授業実践の効果について検討することを目的とする。

キーワード：教科横断的な学習、初等教育、国語教育、生活科教育

**11:15～11:45**

ブライアン・ウェイのドラマ教育の理念・手法の活用に関する考察—生活科での実践に向けて—

石井 信孝（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期/福山市立大学非常勤講師）

英国の演出家ブライアン・ウェイ（Brian Way:1923-2006）は、ドラマの基本的定義を「生き方の練習」とし、役割を、身体、感情を通して深い理解を促すものとし、演劇的活動を通じた全人格発達のための教育理念・手法を示している（ウェイ，1977）。ウェイの知見は、体験を通して自立への基礎を養うことを目指す生活科に示唆をもたらすと考える。本発表では、ウェイの理念・手法に関して、生活科での活用を視点に特徴を述べる。

キーワード：ドラマ教育、生活科、ブライアン・ウェイ

9:00～9:30

## 教室で立ち現れる「主体」と文学教育の意義

阿部 慶子(福山市立大学大学院/福山市立蔵王小学校)

「主体的に学習に取り組む態度」で評価される「主体」像への問題意識から、これからの文学教育で目指すべき「主体」像について考察する。そのために、国語教育における「学習者像」について先行研究をもとに整理し、従来の「主体」の議論に欠けていたものを検討する。その上で、J. バトラーの「agency (行為体)」をもとに、属する社会や文化への抵抗として現れる「主体」を、教室で立ち上がる「主体」の観点から考察する。

キーワード：subject (主体)、agency (行為体)、自己、J. バトラー

9:30～10:00

## 児童のより良い人間関係形成に向けた小学校国語科の実践研究

加藤 滉教(広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻教育実践開発コース)

本研究の目的は、小学校の学級におけるより良い人間関係形成を目指し、児童や教師の自他の言動に対する価値付けに働きかけることができる実践を、国語科において行うことである。今回の発表では、小学校第5学年の学級で実践した説明文教材である『和の文化を受けつぐ』の授業を踏まえ、児童が自他の思いや考えに興味関心を持ち、自他を肯定的な存在として価値づけることへとつながる授業のあり方についての提案を行う。

キーワード：人間関係、国語科教育、説明的文章、自他

10:00～10:30

## 日中韓小学校国語科教科書の比較—特に翻訳教材を中心に—

李 佳蔓(広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期)

本発表は、現在各国が大きなシェアで使用している、中国人民教育出版社小学校国語教材『義務

教育教科書 語文』(2016年)、日本光村図書出版日本小学校国語教材『国語』(令和二年)、及び韓国 MiraeN (미래엔/ミレエン) 出版社『韓国教育部 国語』(2017年)、さらにそれらの教科書と対応している各国の学習指導要領を対象として、中国・日本・韓国の翻訳教材を整理して、照合されたデータを分析したい。これらの考察を通して、三国の社会背景や編集者や出版社などの背景や意図、文化的背景などを探り、さらに各国の社会情勢を踏まえ、それぞれの国の教育観について考察したい。

キーワード：国語教科書、翻訳教材、お手紙

**10:45～11:15**

概念探究学習の「ふりかえり場面」における精緻化方略に関する研究 —抽象化」と「類推」思考を促がす「問いかけ」の効果—

神野 幸隆 (香川大学)

広島大学附属三原小学校第4学年担任時に実践した総合的な学習(概念探究型)「コロナプロジェクト」・「環境プロジェクト」の「ふりかえり」場面における概念形成について、精緻化方略「抽象化」および「類推」を促がす教師の「問いかけ」に着目した研究を進めている。質的分析法「SCAT」を用いて「ふりかえり」場面のワークシート記述を解析し、ふりかえり場面における「教師の問いかけ」の効果について報告する。

キーワード：総合的な学習の時間、概念探究学習、ふりかえり場面

**11:15～11:45**

発信力・表現力を育てる総合的な学習の時間の単元開発—第5学年単元「どうする?! 減災・防災」を事例として—

吉川 修史 (加東市立社小学校)

本研究の目的は、第5学年単元「どうする?! 減災・防災」を事例として、①子どもたちが社会とのつながりを意識しながらいかに学びを深めることができるか、②総合的な学習の時間において知識の習得と知識の活用をいかに考えるか、③子どもたちに社会に関わる主体としての自覚をいかに醸成していくことができるか、④子どもたちの発信力・表現力をいかに育成することができるか、等を明らかにする。

キーワード：総合的な学習の時間、減災・防災、発信力、表現力

9:00～9:30

## 生活科における合科的な指導の展開と特質 —音楽科との関連の場合—

大野木 俊文（鹿児島大学）、長山 弘（盛岡大学）

本研究の目的は、生活科における合科的な指導の展開と特質を明らかにすることである。研究方法は、次のとおりである。①生活科教育を視点として、生活科における合科的な指導の展開を検討する。②音楽科教育を視点として、生活科における合科的な指導の展開を検討する。③検討した結果をもとに、生活科における合科的な指導の特質を明らかにする。

キーワード：生活科、合科的な指導、他教科との関連、音楽科

9:30～10:00

## 個別最適な学びと協働的な学びとが一体となった鑑賞授業の開発 —タブレット端末を活用して—

甫出 頼之（広島大学附属東雲中学校）、井上美由紀（広島県立廿日市特別支援学校）

本研究の目的は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となった鑑賞授業を開発することである。中学校特別支援学級に在籍する1～3学年の生徒14名を対象とし、タブレット端末を使用した「曲当てゲーム」の授業実践を行った。生徒の様子を分析して授業効果を検証した。結果として、同じ教室内でありながら、個人やグループのみで音楽を共有したり、アプリケーションを使用してグループで協議したりすることができた。

キーワード：中学校音楽科、鑑賞、ICT活用、特別支援教育

10:00～10:30

## いじめ予防に向けた授業に関する研究 —「特別の教科 道徳」と特別活動を関連付けて—

片山 峻河（広島大学大学院人間社会科学科研究科教職開発専攻教育実践開発コース）

本研究では、いじめ予防に向けた授業実践について論じる。いじめ予防のために、「特別の教科

道徳」(以下、道徳科)だけでなく、特別活動を通して子どもと教員の良好な関係を築いたり、子どもの社会性や感情調整スキルを育てたりすることも、いじめ予防のポイントになると考えられる。そこで、道徳科と特別活動をつなげるカリキュラムや人間関係を活かした授業づくりを開発し、授業成果やアンケート調査の結果について考察する。

キーワード：いじめ予防、道徳、特別活動、SEL、人間関係

**10:45～11:15**

### 算数科授業研究における教師の観察活動に関する研究

友定 章子 (広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期)

「授業研究」は、教師の学習機会として重要な役割を果たしていることは自明であるが、授業者の成長について論じられることが多い。しかし、観察者として参加することが多く、何を観て、何を学んでいるのかについて考えたい。本稿では、授業研究における観察活動に焦点をあて、教授人間学理論のプラクセオロジーを用いて、観察者が何を観て、何を学ぼうとしているかを明確にし、授業観察モデルの構築を目指すものである。

キーワード：教師教育、授業観察、プラクセオロジー分析

**11:15～11:45**

### 算数科授業における協同的省察に関する研究 (1) -採用4年目A教諭の省察を事例として-

村上 良太 (比治山大学)

基礎形成期である若手教員を授業者として、他者(筆者)との算数科授業における協同的省察の実態やその変容過程、変容の要因を明らかにすることを目的とし、採用4年目A教諭の省察に関する事例研究を行った。その結果、A教諭と筆者との協同的省察の分析を通して、A教諭の省察の変容を明らかにするとともに、変容の要因を導出することができた。

キーワード：算数科授業、省察、教員研修

① ギャローデット大学におけるろう芸術研究の調査－教員養成学部における交流プログラムの開発に向けて－

劉 錡洋（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

初等教育教員を志す学部生に対し、ろう者と聴者の間にある「差異」に対する肯定的な意識を持てるための交流プログラムの必要性が考えられる。本研究では、ろう者学術研究を専門とする米国のギャローデット大学の教員ダークセン・バウマン氏へのインタビューを通してろう芸術における Visual Vernacular（以下、VV）の教育実践への導入に向けた可能性を探るとともに、交流プログラム開発のための資料収集・整理を目的とした。

キーワード：初等教育教員養成、交流プログラム、ろう芸術、visual vernacular

② 児童の「動きの知識」から学習内容を構成する体育科授業の研究

田中 佑明（広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻教育実践開発コース）

本研究の目的は、児童が持っている動きの知識（既存の知識）を教師が事前に把握し、それに基づいた授業を構成し、児童の知識の変容と運動技能の高まりを見とることで、取り上げた手立てが有効だったか検討することである。今回の発表では、小学校3年生に体づくり運動の単元で「投げる」について授業を行い、児童が意識しにくかった二つの知識に焦点を置いた授業を構成し、知識に基づいた体育科の授業づくりについて提案を行う。

キーワード：既存知識、体育科教育、投の運動、知識と技能

③ 生成系 AI が問い直す「学び」・「授業」

神野 幸隆（香川大学）

AI が教育界に進出している。人と AI の在り方を「経験主義」「問い」「創造性」に着目しながら分析し、一定期間対抗したい。一方で「嘘をつくけれど頑張る秘書」「壁打ち相手」「副操縦士」の役割から「働き方改革」へつなげたい。他にも「AI リテラシー」「AI の弱点を逆手



に取ったレポート課題」「AI 学習指導案」等も楽しく研究している。現状報告と参加者との対話を通じ、展望を共有する。この文章も AI が添削・修正し合格した。

キーワード：生成系 AI、AI との競争と共創、学習における AI の利活用

#### ④ 児童の言語感覚を育む話し合いの授業開発

吉田 有希（広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻教育実践開発コース）

本研究は、校長先生への有効な提案を作ることを目指し、その課程にある話し合いにおいて、①相手に考えや理由をたずねる言葉 ②自分の考えや理由を伝える言葉 ③「理解した」ということを伝える言葉 ④話に区切りをつけ、次へ進める言葉 を教えその活用が話し合いを進めることに繋がる実感をもたせることで、相手、目的や意図、場面や状況に応じたことばを直観的に選択・判断できる言語感覚の育成を目指した実践の報告である。

キーワード：言葉、言語感覚、話し合い

#### ⑤ 新美南吉「ごんぎつね」における生と死の相克

雷民激（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

「ごんぎつね」は小学校国語科教育における代表的な文学教材である。そのために、「ごんぎつね」に関して、多くの先行研究が存在する。「ごんぎつね」（草稿の初出は鈴木三重吉が主宰する児童文学『赤い鳥』一九三二年一月。本発表では、小学校四年生の教材として、すべての国語科教科書に採用される「ごんぎつね」の定本を分析する。）においてより重要なのは表層の物語だけでなく、それを通して深層の部分およびそこで示させている世界観を読み取ることができる。その位相を問題化することがこの教材の価値をいかに問うことになるからである。

キーワード：縁意識、痛み、語り直す

#### ⑥ 小学校の教科における言葉かけのスコーピングレビュー —生活科教育への示唆—

内海 美帆（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期）

本研究では、小学校の教科教育で言葉による足場かけがどのように行われてきたのか。また、それはなぜかを明らかにした。研究方法は、体系的にデータの収集検討を行うため、スコーピングレビューを用いた。データはCiNii Researchで検索し、1970年から2023年に刊行された日本の学術論文を対象にした。また、手作業で文献を確認した。以上を踏まえて、小学校における教師の学習指導の手立て、とりわけ生活科教育への示唆を得る。

キーワード：言葉かけ、足場かけ、教師、生活科、スコーピングレビュー

⑦ 【出版特別企画】初等教育カリキュラム学会編

『初等教育の未来を拓く—子どもと教師のウェルビーイングに向けて—』

朝倉 淳（初等カリキュラム学会会長）、木原 成一郎（広島大学名誉教授）

## 【シンポジウム】

### テーマ： デジタル化の中で改めて考える学びの本質

1. 日 時 令和6年1月7日（日）14:15～16:15
2. 会 場 広島大学教育学部 L205
3. 趣 旨

社会のデジタル化や地球温暖化、環境汚染、国際緊張、感染症などにより初等教育の現在と未来が危うい状況に陥っていないでしょうか。本学会では、子どもたちの成長が阻害されれば、それは人間社会の存続に関わる事態になりかねないという危機感のもと、我が国の初等教育カリキュラムや授業実践の背景や課題を明らかにしつつ、子どもと教師のウェルビーイングに向けた考え方を提言する『初等教育の未来を拓く ―子どもと教師のウェルビーイングに向けて―』の出版に向けて準備を進めてきました。

本シンポジウムでは、出版企画第1弾として本書第1部を取り上げたいと思います。学校教育におけるデジタル化の進行はそのほかの社会状況とも相俟って、学校教育そのものの形態や質を変えようとしています。しかし、人が成長し生きていく上での「学び」の本質は変わらないはずで、今日の社会状況の劇的な変化の中で、初等教育の教育実践がどのように変わるのか、変えるのか。デジタル化など今日的な様々な視点を踏まえた上で、改めて学びの本質について議論したいと考え、本テーマを設定しました。

そこで、第1部をご執筆いただく先生方にご登壇いただき、未来の初等教育の創造に向けて、授業研究や授業改善の方法や課題など具体的に提案していただきます。

#### 4. 登壇者候補

##### 【シンポジスト】（発表順）

- ・長山 弘 先生（盛岡大学：第4章「GIGAスクール構想」執筆）
- ・渡邊 巧 先生（広島大学：第1章「主体的・対話的で深い学び」執筆）
- ・高下 千晴先生（呉市立荘山田小学校：第2章「深い学び」執筆）

##### 【発題】

- ・朝倉 淳 先生（初等カリキュラム学会会長：総論執筆）

##### 【司会】

- ・久保 研二先生（島根大学）



The Society of Elementary Education and Curriculum

初等教育カリキュラム学会 第8回研究大会

発表要旨集録

発行日 : 2024年1月7日(日)

発行・印刷: 初等教育カリキュラム学会

〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1

広島大学教育学部 気付